
幽霊協会日本支部

右腕左

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊協会日本支部

【Nコード】

N5803Z

【作者名】

右腕左

【あらすじ】

(はい注目) pixiv重複投稿。

「うらめしやーのろってやるーのろってやるー」

「ん？　なんだ、母ちゃんか」

「母ちゃんじゃないよ！？　寝ぼけてるのか母子の関係が劣悪なのかどっち！？　……いや……なに突っ込んでるんだあたし。……幽霊だよー幽霊の中の幽霊だよーのろってやるーのろってやるー」

「ゆうれいの……ゆうれい？　……え！？　それって昔中国にいたと言われている絶世の美女、ユウ・レイの幽霊ってことですか！？　文献が揃ってれば世界三大美女楊貴妃の座が脅かされるって聞いてたけど……うん。まあ、今と昔は美的感覚が違いますから……」

「それは暗にあたしが不細工ってこと！？　いや……別に自分でも美人だとは思ってないけど……かわいい系というか……癒し系というか……生前はそれなりに告白もされたし……」

「いや、不細工って事では無くって、とてもかわいいですけど、美人と言うのは少し違うかなって事です。ユウ・レイさんはかなりかわいいですし、完全に僕の好みです。胸の主張が寂しいところもグツトです」

「そのサムズアップもウザいし要するに胸小さいって言われたわけだけど……なんというか……ありがと」

「それで……ユウ・レ——」

「諸事情あつて言い忘れてたけどあたしユウ・レイじゃないからね！？　というかユウ・レイとか生まれてそして死んでも初めて聞いたから！」

「え？　なんだ、違ったのか。……なら、ユウ・レイじゃないのなら一体、何・レイなんですか？　もしかしてアム……」

「……おおー！　危なかったー！　危うくエベレストーおもしろくない男に成り下がるところだった……」

「ってここエベレストだったの!? 道理で君は日本じゃおよそ考えられないような重装備でいるし周りはヒヤダインを執拗に浴びせられた後みたいだし寒すぎてあたしの末端という末端の感覚が欠如していくわけだよ!」

「幽霊でも寒さは感じるんですか?」

「うん、すごい感じる」

「……………」

「え、なに? 変な目でこっち見て」

「いや、幽霊でも寒さは感じるのかなーと思ひまして」

「さっき言ったよね!? 既にキツパリ回答済みだよね!」

「幽霊が放つ磁場のせいか耳の調子が悪いんです。ですので、もう一度お願いします。出来ればこのマイクに」

「どこからそのマイクが!? それに幽霊から磁場は出ないしそもそも磁場に影響を受けるとすれば真っ先にそのマイクだから!」

「はい、寒いのなら服貸しましょうか?」

「切り替えの速さがメトロノーム並みだよ! …………… ふう。大丈夫だよ、服なら自由自在に変えられるから。………… ほら、瞬間にしろくまさんの着ぐるみスタイル」

「………… へえ。変身の間裸になったりしないのかあ。………… へえ」

「なんか夢壊しちゃってごめん!」

「それにさっきまで着てたメイド服の方が僕は好きでした」

「そんなの着てなかったよね!? もっとおどろおどろしいスタイルだったよね!? きちゃんと幽霊やってたから! そんなの着たら羞恥心で成仏してるから!」

「ははははははは!」

「その笑いは何に起因するの!? さっきから君の世界は君一人で完結しすぎだよ!」

「それで、さっきここがエベレストだって驚いてましたけど、幽霊なのに知らなかったんですか?」

「ああ………… ああ………… こほん。あ、いや、あたしまだ下っ端だから、

会長に勝手に飛ばされるだけなの」

「会長！？ 幽霊になつてなおヒエラルキーの鎖にがんじがらめですか？」

「ヒエラルキー？ ああ、そういえば確かにそうだね。幽霊になつたら否応なく強制的に『幽霊協会』に属されるの。あたしは日本人だから『日本支部』なんだけど、ここで言う『日本』が土地じゃなく『日本人』だなんて、ここに飛ばされて初めて知つたよ」

「確かに僕も日本人の血は入ってますね。国籍も日本ですし」

「え、その言い方って要するにハーフってこと？」

「はい、日本とアメリカのハーフの父とフランスとエジプトのハーフの母があれこれして生まれたのが僕です」

「超エリートハーフだよ！ ハーフ界の風雲児だよ！」

「でもそんな感じで生まれた僕が日本の田舎に足を向ければ五万と出て来そうな平凡顔ですからね。DNAの日本贗品には驚きます」

「確かに、色んな装備で目しか見えないけど日本人臭がとにかくすごいもん」

「そうですね……子供の頃はよく『ハーフ君』って言われて虐められてました。誰かが『ハーフ君』って呼ぶと絶対に違う人が『その顔でハーフかよ！』ってね。子供ながらに超高度な精神攻撃ですよ。その頃から僕は歪み始めたんです。母には強く当たり父からは逃げるばかり。いっつも部屋に引きこもってましたよ。それから――」

「ストーリーップ！ 暗いよ！ 暗すぎだよ！ 今エベレスト登ってるんだよね！？ そのメンタルじゃ行き着くのは頂上じゃなく死だよ！ 幽霊協会の仲間入りだよ！」

「ああ、そうでした。駄目ですねこれじゃ。気持ちを盛り上げて行かないと。えーっと、それじゃあ質問いいですか？」

「ん、なに？」

「『幽霊協会』って一体何の為に存在してるんですか？ というかそもそも幽霊がこの世に存在してる意味は何ですか？ 何の役に立

つてるんですか？ 僕には幽霊の存在意義がわかりません」

「唐突にあたしの存在全否定だよ！ あたしの根底を果てしなく揺さぶったよ！」

「あ、今疑問に思ったんですけど、どうして僕には幽霊の姿も声も感じ取れるんでしょう。目に見えるからには光が幽霊に反射して、その光を僕の網膜が受け取ってるんですよね。幽霊は実体が無いはずなのになぜ光を反射するんでしょうか。それに声、つまり音っていうのは空気の振動ですよ。実体の無い幽霊がなんで空気を振動させる事が出来るん——」

「ストー——ップ！ 消えるよ！ なんか今あたし消滅しそうだったよ！ 成仏とかそんな優しいものじゃなくて矛盾を回避するために世界があたしを抹消しそうだったよ！ その矛盾はあたしたちにとってブラックボックスだから！ パンドラの箱だから！ 開けないでお願い！」

「あ、はい。わかりました。もう開けません。誓います。え——つと、えー、あの石に誓います」

「ただだけ適当！？ 数分後には念仏みたいに唱えられそうなんだけど！」

「はい。それじゃあもう一つ質問いいですか？」

「その『はい』はどういう意味！？ 教師よろしく話を区切るためのものなのか、ただ純粹に肯定なのか、それだけでいいから教えて！ 教えてくれたら質問を許します！」

「ああ、それは中者……ですかね」

「前者でも後者でも無く中者！？ 今の場合中者なんて無いから！ あるとすればささやかな『、』ひとつだから！」

「僕のところには何をしに来たんですか？」

「よし！ この短時間でもう慣れた！ すごいあたし！ すごいあたしの順応能力！ …………… えっとね、何をしに来たかと言えば、あたし幽霊だし、脅かしに来たんだよ。というか『幽霊協会』自体人を脅かす為だけの組織だから」

「何ですかその不毛過ぎる組織は！」

「いや、あたしたちにとつては全く不毛じゃないんだよ。これは幽霊になってからなんだけど、人を脅かすのってとにかく気持ちいのゾクゾクってなるんだよ。最初のうちはこれでもかっけくらい恐がってくれる人ばかりだったのに、最近はもうてつきりなんだよね。最近知ったんだけど偉くなればなるほど上玉の所に行けるらしくて、最初のうちは味を覚えさせるためなんだって。あたしなんかは完全に術中に嵌ったよ。初めて脅かしたのは小学校低学年くらいの男の子だったんだけど、ブルブル震えて泣き叫ばれた時はもう気持ち良すぎて立ってられなかったもん。またそのへこたれたあたしが恐かったらしくてね、男の子の声がどんどん大きくなっていった、あたしもその声聞いたら座ってもいられなくなっちゃって、それを見た男の子の声が、ってな感じでもう上乘せの連鎖だよ。最終的にはあたし気絶しちゃってね、友達のちーちゃんが気持ちいいって言ってたあの行為でもさすがにこれ以上はありえない！ て本心から思ったも……… あ、ごめん。あたし今変な顔してなかった？ 思い出しただけでも……… じゃなくて、まあそういうわけなの、『幽霊協会』も不毛じゃないでしょ？」

「十分過ぎる程の不毛さですよ！ 快楽を求め過ぎですよ！ 麻薬組織と同じやり方じゃないですか！」

「そうでもな……… ってそのマイクずっとあたしに向いてるけど何してるの？」

「あ、いや、気にしないでください。こうしているとエベレストの泣き声が聞こえるんですよ、登山というものは山との会話から始まります」

「なんかすごいかわいけど絶対に嘘だよ！ エベレストの泣き声は残らずあたしが撃墜しちゃったよ！ …………… まあいいや。えっと、不毛じゃ無い理由がもう一つあって、あたしたち幽霊は最高の快感を得れば成仏することが出来るんだよ。人間の最大の目的は繁殖する事。あたしたちの最大の目的は成仏する事。人間も同じ

ように、目的に関わる事柄には全て快樂が伴うんだよ。それをきちんと平等に順序立てて行うのが『幽霊協会』なの」

「へえ、そんなことがあるんですか。すごいですね、宇宙って」

「人の話聞いてた！？ 宇宙の神秘については一言も言及してないよね！？ ああもう次はこっちが質問するよ？ なんで君はエベレストに登ってるの？」

「……………あの、僕、ずっと高校にも行かずに引きこもってたんですよ、でも、あるアニメをきっかけにこのままじゃ駄目だなんて思いました、三日前、思い立ちました」

「どういう思考回路！？ 引きこもりから三日でエベレストとか舐め過ぎだよ！ 世界一の称号舐め過ぎだよ！」

「いえ、エベレストなんて宇宙の広大さに比べたらちっぽけですよ」

「ここにきて宇宙の神秘が出てきたよ！ でも何万倍も何億倍も人間の方がちっぽけだって事に早く気付いて！」

「ははははははは！」

「だからその笑いは何！ それにそもそもこのままじゃ駄目だと思っただけでまず高校に行つて！」

「はい、高校には行こうと思ってるんですが、その前にワンステップ踏もうかと」

「第一歩で臨終しちゃうから！ 何？ 君にとって高校はエベレスト以上の存在なの！？」

「いえ、宇宙の広大さに比べたら何もかもちっぽけですよ」

「ならばすぐさま行つて！ 死ぬから！ エベレストにとって君はプチプチの一粒程度だから！ プチンとやられるから！」

「なんですか？ 僕が志半ばで諦めるようなひ弱な男に見えるんですか？」

「三日前まで引きこもってた以上少なくとも身体はど貧弱だよ。でも……………」

「でも、なんですか？」

「いや、やっぱりやめとく。あたしみたいな幽霊が言ってもあれだ

し、それ以前に生きた人間とこんなに話すなんて、本当は駄目なんだよ」

「駄目……なんですか。ならなんで……」

「なんでだろうね。あたしも自分でよくわかんないんだけど、成り行きというか、良い言葉で言えば惹き込まれたというか。それに会話出来たのも久々だったし、君に突っ込むのは気持ち良かったし、楽しかったし……まあ、要するによくわかんないね」

「僕も……同世代、ですよ？ 同世代の人と会話するなんて本当に久々で、それに女の子と話すなんて小学校以来ですし、短い間でしたけど、とても楽しかったです。興奮しました」

「その興奮は良い意味だね？ そうだよ、良い意味だよ。あたしは知ってる。良い意味が一体どんなかは知らないけど。……それじゃあそろそろお別れだね」

「え、なんですか？」

「今までの会話思い出してみて！ びっくりするくらいそういう流れだったから！ ……それじゃあ消えるよ？」

「……」

「いい？」

「……」

「……」

「……はい。あの……僕たち、また会えますか？」

「……それは無理だよ。宇宙は広大だから」

「……」

「じゃあね」

「僕、絶対に登りきってみせますから！」

「先輩。たった今入会しました園寺山ジュールです。宜しく願います！」

「なんかもう果てしなく猛烈に案の定だけど十分後に息絶えるとは思ってもいなかったよ！」

おわり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5803z/>

幽霊協会日本支部

2011年12月19日13時57分発行